東北復興日記 56

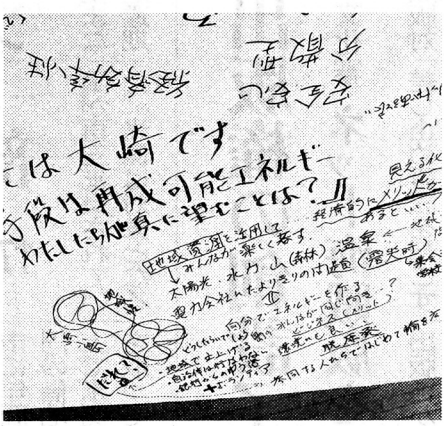
話す中で 気づき合う

NPO法人
おおさき地域創造研究会事務局長
小玉順子さん

八月末「東北電力電気料金九月から値上げ」と新聞の一面に、懐にひびく記事が掲載され、いよいよ身近に考えざるをえなくなりました。そんなことが頭の片隅にあったからか、通勤途中の風景で気づいたのが、居並ぶ屋根の太陽光発電パネル。以前よりずいぶんと増えていました。

震災の教訓から、日常使うエネルギーは、通常の電力、ガス、灯油、そして自然エネルギーと分散すべきかもしれないと思ってはいましたが、考えるキッカケがないまま日々を送っていました。

そのような折、宮城県大崎市で開催された「自然エネルギーを考える市民のつどい」に参加しました。映画「パワー・トゥ・ザ・ピープル」の上映に続く講座では、一家族が暮らしの中で消費するエネルギーはどれくらいか、「冬場のいちご」のように、エネルギーをたくさん使ってつくっているものが多い、という講師の話に興味が湧きました。



講座に続くワールドカフェのテーマは「場所は大崎、手段は再生可能エネルギー　私たちが真に望むことは」と、自分に引き寄せて考えを出し合うものでした。「要はわが家で消費するエネルギーをわが家で作り出せればいいのよね」「地域の身近な水路で小水力発電ができるかも」など。自分一人で考えていてはなかなか思いつかなかったことを、多様な人と話す中から「気づき合う」という興味深い手法でした＝写真。もっと話をしたい、というところで時間切れでした。

でも、これから十一月までの間に市内の視察や事例研究、再生可能エネルギービジネスなどについて四回の講座「おおさき再生可能エネルギー利活用セミナー」が開催され、継続して考えるチャンスがあります。再生可能エネルギーの地域自給や地域活性化にどう生かすか、「知恵」を出し合う良い機会となりそうです。

この連載は、東京のNPO法人「女子教育奨励会」と、被災地の女性たちが協力して復興に取り組む「結結プロジェクト」の協力を得て、掲載しています。